



Graf法に必須となる 垂直デバイスの製作

Graf法に必須となる
垂直デバイスの製作

星野 弘太郎
慈誠会 山根病院 整形外科

本整形外科超音波学会 (2024/10/19・20 京王プラザ)

星野 弘太郎

慈誠会 山根病院 整形外科

第35回日本整形外科超音波学会 (2024/10/19・20 京王プラザ)

抄録

DDHの診断において、Graf法の有用性は確立されているが、原法に従わない手技不良によりエラーがもたらされ、海外では訴訟に至ったケースもある。創始者Grafは本法の精度をさらに高めるため、超音波プローブ長軸を床面に垂直に固定するデバイスを作成した。これによりtiltingとrockingが消失し、slidingとrotatingの動きのみとなる。2022年に出版されたGraf法成書の中で、Graf法はフリーハンドでなく、垂直デバイスの使用を義務付けた。そのため自作でこのデバイスを製作した。土台板に垂直なポールが立ち、その先端から直角に伸びるアームには中央で屈曲するヒンジがある。アーム先端から垂直に降りるバーは上下にスライドし、バー下端にはプローブを把持するクランプが取り付けてある。現在医療機器メーカーと商品化検討中である。Graf法のラーニングカーブは200例ともいわれるが、本デバイスによりこれを軽減し、かつ精度の向上がもたらされる可能性がある。